# モジュール型教材による中級後期日本語教科書開発プロジェクト 実践報告（2014～2017）

髙屋敷 真人
宮内 俊慈

**要旨**

このプロジェクトは、2014 年度に関西外国語大学国際文化研究所（以下 IRI）の IRI 共同プロジェクトとして採択され、以後、プロジェクト研究助成を受けながら継続して行われているものである。本プロジェクトの主旨は、関西外国語大学留学生別科の総合日本語コースのレベル 6（中級後期）の教科書開発プロジェクトとして中級後期の会話用「モジュール型教材」を作成することである。開発教材は、2014 年度秋学期から試用し、アンケート調査や授業評価の結果を分析し改訂を重ねている。本論は、過去三年間に渡る教材開発と改訂作業の実践報告である。

【キーワード】　中級日本語会話、自律的学習、学習者主体、モジュール型教材、接触場面

## 1. はじめに：理論と背景

関西外国語大学留学生別科では、2008 年秋学期（9 月～12 月）より中級後期日本語クラス（日本語 6: Japanese6、以下、JPN6）のメインテキストとして、モジュール型教材の開発プロジェクトが新たに始まり、それ以降、毎学期、新しい教科書の試用と試用教材についての留学生へのアンケート調査が続けられている。このプロジェクトは、2014 年、IRI の共同研究にも採択され、以後三年間、学生へのアンケートの調査結果を分析し、それに基づき、教材の改訂も続けられている。本論は、2014 年から三年間に渡る教材開発の概要とアンケート調査の実施、アンケートの分析結

果等についての報告である。

JPN6 は、中級後期のレベルに該当し、本学の日本語コースの場合で言えば、初級レベル（JPN1 ～ JPN4：初級テキスト『げんき I』、『げんき II』使用）を 4 学期で終え、中級前期レベルで 1 学期間（JPN5：90 分授業を週 3 回で、15 週間）中級教科書を使用し学んだ学生が対象である。勿論、学生の学習歴は、それぞれの機関によって異なるが、1 年半から 2 年半で初中級レベルの日本語コースを終えて来た学習者が多く見られる。コースの目的は、日本語能力試験 N2 レベルに合格するための日本語能力の養成である。

JPN6 は 2008 年度に新設されたコースで、コース教材は、筆者（髙屋敷）が 2008 年度 6 月から本学オリジナルのモジュール型教科書を作成し、2008 年度秋学期より試用を開始している。このプロジェクトで新しい教科書を開発するにあたり、学習者にとってよりコミュニカティブな学びの場を提供することを目指した。その際、「接触場面」(ネウストプニー 1995:186-206) や「モジュール型教材」(岡崎 1989:34) という教育理念に則り、実際に学習者が自分の日常で遭遇するような実践的な場面にこだわり、教室内と教室外の言語活動が乖離しないように配慮した。本学の留学生は、約 80%がアメリカからの交換留学生で、提携校と単位が相互取得できるので、日本語以外の講義は英語で行われている。そのような英語圏からの留学生が関西という土地で、どのような日本人とどのようなコミュニケーションを交わすのかということを常に念頭に置きつつ教室活動を考え、教材の開発を行った。詳しい経緯については、「モジュール型教材による中級後期日本語教科書開発プロジェクト」（髙屋敷 2012:119-133）、あるいは、「モジュール型教材を利用した中級日本語会話練習—教室内と教室外の言語活動の統合に向けて—」（髙屋敷 2013:131-146）にまとめてあるので、理論の位置付けや背景の詳しい説明は、ここでは割愛する。要点は下記の通りである。

① 接触場面を明確にすること：ターゲットとなる学習項目を使用し、学習者がいつ・どこで・誰と何を行うのか？ それによって何ができるようになるのか？ 接触場面での学習者の年齢、性別、社会的・文化的立場などを考慮しているか？（ネウストプニー 1995:186-206; 宮崎、マリオット 2003:353-381）

② そのような接触場面で、学習者が実践的に日本語を使用できるよう、教室活動をできるだけ教室外の活動に近づけること。 (Nunan 2015:xi-xvi）

③　談話表現への配慮：女性語・男性語への配慮、世代差ある表現への配慮、方言への配慮、更に、漫画・アニメ・古語などジャンル別表現などへの配慮、　縮約形、短縮句・省略、助詞の省略、繰り返し、聞き返し、倒置、あいづち、間投詞、フィラー、呼び掛け、決まり文句（慣用句・挨拶）、終助詞などを適宜使用しているか？　（メイナード 2005）

④　学習者の興味や関心、ニーズに寄り沿うものであるか、学習者が自分の言いたいことを自分らしく言えるような選択の自由、選択の幅があるか、教室活動中の「即興的な」発話の拡大・発展が可能になるような柔軟性があるか？

また、本プロジェクトでは、コミュカティブ・アプローチに基づき、自律学習、すなわち、学習者が学びたいと思うことを自ら選択し自発的に学ぶことを可能にすることも主眼の一つである（岡崎他 1990:67-182; 伴 2003:261-270/2009:2-11; トムソン木下 2009:17-25 など）。これに加えて、小林が「教室を『教室の外のコミュニケーションをメタ的にとらえ直す場』」として位置づけ、「この位置付けにある限り、教室は決してバーチャルな仮想空間ではなく、学習者にとって、どこまでもリアルな現実空間となる」こと、そして、「教室の中と外のギャップを埋めるのは、『教室の中に限りなく実生活に近い状況設定を用意し、それを体験させる』だけが唯一絶対の方法ではない。」（小林 2009）と指摘していることに注目したい。小林は、学習者が教室という場において「自分が言いたいことが話せたか」、「自分らしく振舞えたか」といった教室活動における会話の「質の視点」への発想の転換を我々教師側に促している（小林 2009）。本プロジェクトでは、学習者オートノミーの促進に加え、これらの小林の指摘についても教材開発の主柱の一つとして盛り込みたいと考えた。

本プロジェクトでは、以上のようにコミュニカティブ・アプローチに根ざして、「学習者主体」の「自律的」な教室活動を促すような教育概念を踏襲しつつ、教室活動を教室外の言語活動を踏まえた「接触場面」を重視する場として捉えること、教室内活動をできるだけ教室外活動に近づけること、学習者の自己実現のために学習者オートノミーをできるだけ促すこと、更に、上記で小林が指摘する学習者が自分らしく振舞えたかというような「学習者の自己実現」する場であるという視点も取り入れていくことを理念としている。この点に関して、Nunan も、近年、教室活動を離れた教室外での言語学習（out-of-class learning）において、学習者が自律的に自ら学習する機会を提供するような活動の重要性を説き、教師の役割は、インストラクター（指

導者）というよりファシリテーター（促進者）で、学習者が自らのニーズと興味関心に基づき自ら表現したいことを手助けして行く存在であるべきだと提唱している（Nunan 2015:xi-xvi）。では、以下、2014 年以降 3 年間に渡り、新しい教材開発と改訂作業がどのように行われて来たかについて具体的に述べていきたい。

### 2.1. 中級用教材としてのモジュール型教材の利点

モジュール型教材とは「教科書のように特定の順序に沿って一つ一つの課を学習するタイプの教材とは違い、学習者が既に学習し終わっている項目から一定程度独立して使えるようにした教材」（岡崎 1989:34）である。つまり、「通常の教科書が順序を無視して使うのが難しいのに対して、学習者のニーズが新たに生起したその時点においてそのニーズに合わせた形の活動を実施するような使い方を可能」（岡崎 1989:34-35）にさせるものである。本プロジェクトでは、下記の理由から、このようなモジュール型教材の利点は中級教材で最大限に活かせるのではないかと考え、モジュール型教材を主たる教科書として採用することに決定した。

① JPN6 は中級後期レベルであり、媒介語を使わず日本語のみでのコミュニケーションがある程度可能なレベルである。
② 中上級レベルでの学習項目（文型）の提出順序を積み上げていく必要がない。
③ 常に変化流動する学習者のニーズに柔軟に対応できる。
④ 情勢の変化に伴う学習者のニーズが新たに生起した時点で古くなった箇所のみ簡単に差し替え可能である。

### 2.2 モジュール型教材の利点を活かした改訂例

2008 年に作成された新しい教材では、本学の留学生へのニーズ調査の結果から、できるだけ話題が偏らないように留意しつつ、各ユニットのトピックを下記のように決定した。

Unit1　「Mixi って何？」
Unit2　「交通機関のマナー」
Unit3　「夫？主人？」
Unit4　「ユニクロ、MUJI は海外で成功するか？」

Unit5　「インターネットは人類を幸せにしたか？」

Unit6　「急増する外国人雇用」

教科書のユニット（モジュール）は、1 から 6 まで順番に並んでいるが、この順番通りに学習して行く必要はなく、その時々の学習者のニーズ、国内外の時事問題の変化に応じ、どのユニットからでも学習することが可能である。従って、学習者のニーズが新たに生起した時点、あるいは世界や国内の情勢、流行などに変化が起きた時点で随時差し替えが容易に行えるという利点がある。このようなモジュール型教材ならではの利点を活かし、下記のような改訂が行われてきた。

① 2008 年、新教科書を使用し始めた直後、リーマン・ショックによる金融危機の影響で、ユニット 6 のトピックである「急増する外国人労働者」という本文がすぐに時代に合わないものになった。即座に対応し、翌年 2009 年春学期は、ユニット 6 の本文の内容をフィリピンやインドネシアからの看護師や介護士の就労問題に焦点を当てたものにし、「外国人労働者、受け入れますか？」というタイトルに書き換えて、ユニット 6 のみ差し替えを行った。

② 2008 年以降、Mixi 登録方法が招待制からウェブ登録制になる、「足跡」機能が廃止されるといった変更があったのであるが、その都度、本文の該当箇所を訂正した。

③ 2008 年に大流行していた Mixi も人気が下火になり時代に合わないものになってしまった。それに代わるツールとして LINE に注目し、2014 年秋学期の前には、ユニット 1 の本文のトピックを Mixi から LINE に改訂する作業を行った。

## 3. 2014 年度 IRI 共同プロジェクトの成果

2014 年度の共同プロジェクトの一環として、2014 年秋学期 JPN6 の担任であった筆者（宮内）によるアンケート調査が行われた。アンケート調査は、大きな試験に重ならないように、2014 年の 10 月 22 日から一週間の予定で行った。この時期、JPN6 のクラスでは、ドラマを除く全 6 ユニットの内ユニット 4 までが終了しており、その 4 ユニットに関する学生の評価を収集した。この学期には、JPN6 の学生は、全部で 35 名（男子学生 13 名、女子学生 22 名）おり、その内 20 名（男子学生 6 名、女子学生 14 名）の学生からアンケート調査の回答を得た。この学期の前に変更を行ったのはユ

ニット 1 で、トピックを Mixi から LINE に変えた。Mixi の時のデータがないので比較することはできないが、この時に調査を行った 4 つのトピックの中では、トピックへの関心、ダイアログの良否の評価ともにかなり良好な結果を得ることができた。詳しい調査内容と結果報告については、「モジュール型中級後期教科書の学生による評価」（宮内 2015:49-69）を参照していただければ幸いである。

## 4. 2015 年度 IRI 共同プロジェクト実践報告

前年度のユニット 1 の改訂に引き続き、2015 年度は、ユニット 6 の改訂作業を開始した。候補として、昨年度のアンケート調査で、比較的学生からの面白さの評価が分かれたユニット 4「ユニクロ、MUJI は海外で成功するか？」、そして、コース担任（宮内）が内容の難易度と学生の興味という観点から改訂の必要性を感じていた、ユニット 6「外国人労働者、受け入れますか？」の二つが挙げられた。学生へのアンケート調査の分析結果を検討した結果、ユニット 4 は、ビジネスに関することで、トピックの面白さに関しては、他ユニットと遜色がなかったが、内容に関しては高く評価されていることを踏まえ、今回は残すことになった。また、ユニクロは、2008 年から変わることなく、留学生をはじめ、日本を訪れる外国人にその人気を保っていることも考慮に入れた。

ユニット 6 は、少子化に伴う日本の労働力不足を補う策としての外国人労働者の受け入れ問題を扱っていたが、世界各国の移民の労働問題、あるいは、ブラジル日系人の肉体労働の問題、フィリピンやインドネシアからの看護師、介護士の受け入れ問題など、様々な議論が期待できるいいトピックであったが、留学生の日常とは少々かけ離れている内容であったため、留学生の反応が悪かった。そこで、より本学留学生の興味関心に沿うものとして、日本の就職活動事情と外国人留学生の日本での就職活動について新たに本文を書き直すことになった。2015 年春学期が終了してからの学休期を利用し、改訂作業を進めた。昨今、外国人留学生を対象とした有給のインターンシップを行う日本企業が増加しており、本学でも昨年から留学生を対象としたインターンシップが始められていること、日本人学生のみならず留学生対象の就職サイトが増えていることなども考慮して、本文の内容を考えた。その際、アメリカ人留学生が日本人学生の就職活動について持つ疑問を参考にした。例えば、日本の大学生が内定を求めて 3 年次に一斉に就活を始めること、同じスーツを着用し髪を黒く染め直すことなどを盛り込み、アメリカの大学生の就職活動の様と比較できる内容にした。出来上

がった本文をもとに、新しいユニット教材を作成し、2015 年秋学期のメインテキストとして試用を行った。

学期末にアンケート調査を実施した結果、関心度については、“agree”が 12 人、“disagree”が 6 人であった。内容の良否に対する評価も“agree”が 10 人、“disagree”が 3 人で、ともにまずまずの成果が得られた。

詳しい実践報告については、「モジュール型中級後期教科書の学生による評価（２）」（宮内 2016:25-54）、「モジュール型教材による中級後期日本語教科書開発プロジェクト実践報告（2015）」（髙屋敷、宮内 2016:55-68）を参照していただきたい。

## 5. 2016 年度の改訂作業

2015 年秋学期のアンケート調査の結果を分析したところ、昨今の「日本食ブーム」が影響しているのか、今後取り上げて欲しいトピックの中には、「日本食」、“cooking”を挙げる学生が見られた。ユニット 4 は、「ユニクロ、MUJI は海外で成功するか？」というタイトルで、日本式ビジネスに関連するトピックであったが、“agree” が“disagree” を上回ったものの“agree”が 8 人（33.3%）で“disagree”が 6 人（25%）という状況で、あまり高い評価を受けていないことがわかった。このユニットは、前回の調査でも、調査対象となった 4 つのユニット内で拮抗はしていたものの最下位の評価であったこと、また、ユニクロが既に世界的にある一定の評価を得ており、実際の状況と比較して内容的に合わなくなってきていることから、トピックの変更をすべき時期に来ていると考えた。そこで、2016 年度の改訂作業として、ユニット 4「ユニクロ、MUJI は海外で成功するか？」を取り止め、「和食」「日本食」に関するトピックに変更することに決定した。改訂作業は、2016 年度の夏季休暇を利用して行われた。

その際、「ユニクロ」のトピックを廃止すると、全 6 ユニットの中で、ビジネス分野に関する話題がなくなってしまうので、全 6 ユニットのバランスを考え、「和食」に関するビジネス関連の話題になるように考慮した。その結果、「ユニクロ」の世界進出は成功したかという話題に代わるものとして、世界的な和食ブームを背景とした日本の外食産業の世界進出は成功しているかという内容で本文を書き換えた。改訂ユニットは、2016 年度秋学期に試用された。アメリカをはじめとする留学生の母国に日本食産業がどのように進出しているかという点を中心に、改訂内容が学生の興味、関心に訴える内容になったのかどうかアンケート調査の結果を待つことになった。下記が改訂された本文の例である。

図 1　改訂前の本文の一部（「ユニクロ、MUJI は海外で成功するか？」）

会話３　【発表の後、ラウンジで】

ジョン：　発表、どうだった？　すごく緊張しちゃったよ。

けん　：　大丈夫！　とても面白かったよ！

まり　：　ほんと、よかったよ！　でも、ユニクロの服は、アメリカで売れているのかなぁ…？

アン　：　そうね…、大々的に宣伝した<u>わりには</u>、駄目みたいよ。私は、日本企業のアメリカでの成功は、アメリカの消費者に対する戦略<u>次第</u>だと思うの。アメリカの消費者が何を望んでいるかもっと考えなくちゃだめだと思うの。日本で売れている物がアメリカでも売れる<u>とは限らない</u>でしょう？

ジョン：　うん、そのとおりだと思う。アメリカ人のニーズや要望に沿わなくちゃいけないと思う。

けん　：　うん、賛成！

ジョン：　だから、アメリカのユニクロでは、袋に入っている下着類の生地を実際に触ってみたい<u>という</u>アメリカ人の要望を聞いて、袋から出してラックにかけるようにしたんだって。

アン　：　へぇー、そうなんだ。アメリカ人のリクエストに応えて、いろいろ工夫してるってわけね。

ジョン：　うん、そう。「郷に入っては郷に従え」ってことかもね。

図 2　改訂後の本文の一部（「日本食ブームって、本当？」）

会話３　【発表の後、ラウンジで】

ジョン：　発表、どうだった？　すごく緊張しちゃったよ。

けん　：　大丈夫！　とても面白かったよ！

まり　：　うん、すごくいいディスカッションだったよ！

ジョン：　まじで？　よかったぁ。ありがとう！

けん　：　でも、和食って、本当に世界中でブームなのかなぁ…？

ジョン：　そうだな…。それは、やっぱり、何を「和食」と呼ぶか<u>という</u>考え方<u>次第</u>だと思うけど…。ココイチや回転寿司なんかは伝統的な「和食」とは呼べないんじゃないかな。

まり　：　うん、そのとおりだと思う。昔の日本人が家で食べていた、ごはん、しっかりだしをとって作ったみそ汁と煮物などのおかず、それに漬け物という食事が本当の和食なんじゃない？

けん　：　うん、賛成！　でも、やっぱり、海外に進出して行くには、その国の消費者のニーズや要望に沿わなくちゃいけないと思う。

ジョン：　うん、そうだね。ブラジルには、マンゴーを巻いたフルーツ寿司があるそうだよ。

アン　：　あ、オーストラリアにも、日本人が経営していないお店では、寿司と焼き鳥セットとか、日本では見たことない変なメニューがあるけど、けっこう人気あるよ。

けん　：　そっか。おもしろいね。「郷に入っては郷に従え」ってことかもね。

## 6. 2016 年度秋学期のアンケート調査の結果と今後の展望

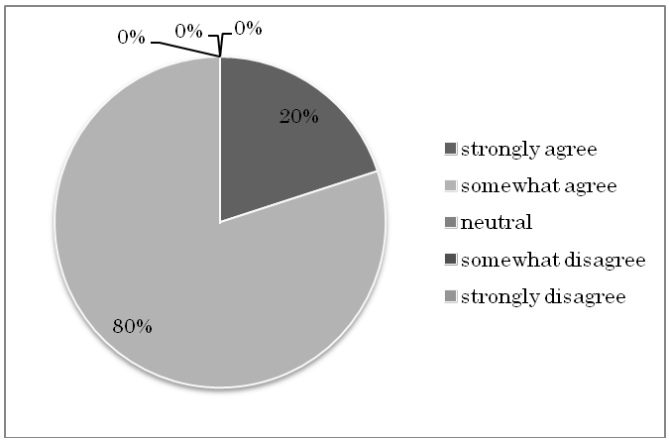
ここで、2016 年秋学期のアンケート調査の結果を見てみたい。アンケート調査は、2016 年の 11 月 25 日の授業時間の最後の 15 分程度で行った。この時点で JPN6 のクラスでは、ドラマを除く全 6 ユニットの学習が終了しており、その 6 ユニットに関す

る学生の評価を収集した。この学期には、JPN6 の学生は、全部で 22 名（男子学生 10 名、女子学生 12 名）おり、クラスを欠席した 2 名を除く 20 名の学生からデータを収集することができた。調査項目としては、教科書全般に対する評価と各ユニットの評価に関しての質問を設け、全項目数は 87 であった。全体的な質問としては、「教科書 (Packets) は全体的にいいと思う」かどうか、今後「取り上げて欲しいトピック」は何か、さらに、JPN6 の教科書に対する自由記述欄（Free Comment）も設け、ユニット毎の項目としては、それぞれのユニットの「トピックは面白いと思う」かどうか、ダイアログの内容、長さ、難しさ、語彙の多さ、難しさ、練習内容、表現説明の内容、聞き取り練習の内容など 15 項目に渡って詳細に調査した。質問内容は、前回 2015 年の秋学期のアンケート調査と同じものである（宮内 2016:47-54）。

ここでは、それらの項目の内、教科書全体に対する評価と各ユニットのトピックに対する興味の比較とダイアログに対する内容評価の比較に絞って報告する。

まず、教科書全体についての評価であるが、図 3 の結果となった。“strongly agree”と“somewhat agree”を合わせると、100%の学生、つまり、20 人中全員が「良い」という評価であった。「まあまあ」と考えられる“neutral”の回答も一人もなく、JPN6 の教科書がかなりの好意を持って評価されていることがわかる。

**図 3「教科書は全体的にいいと思う」に対する賛否**

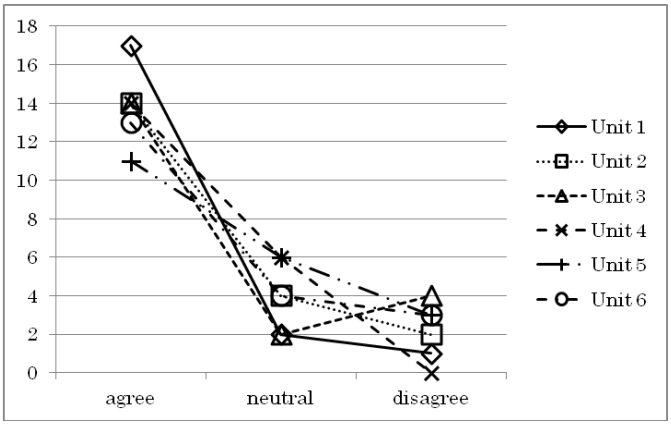



ユニット毎の比較では、まず、それぞれのトピックの面白さについて調査した（図 4 参照）。このグラフでは、“strongly agree”と“somewhat agree”を合わせて“agree”とし、“strongly disagree”と“somewhat disagree”を合わせて“disagree”としている。

このグラフを見ると、全てのユニットにおいて“agree”が“disagree”を上回っており、

特に、ユニット 1、ユニット 2、ユニット 4 の評価が高いことが分かる。ユニット 1 は「LINE、やってる？」というタイトルで、2014 年秋学期に入れ替えたトピックである。入れ替えた学期の調査においても二番目に高い評価を得たトピックであったが、今回は一番高く評価された。やはり、現在の大学生においては日本人学生であれ、留学生であれ SNS なしに学生生活だけではなく、日常生活そのものを送れないと言えるだろう。したがって、それを取り上げたトピックの評価が高いことは、ある意味で当然のことだと頷ける。また、ほとんどの日本人大学生が LINE を利用している一方で、留学生の場合は、Facebook や Twitter の利用の方が一般的であり、その対比からもこのトピックが高く評価されているのであろう。

**図 4「トピックは面白いと思う」に対する賛否のユニット毎の比較**

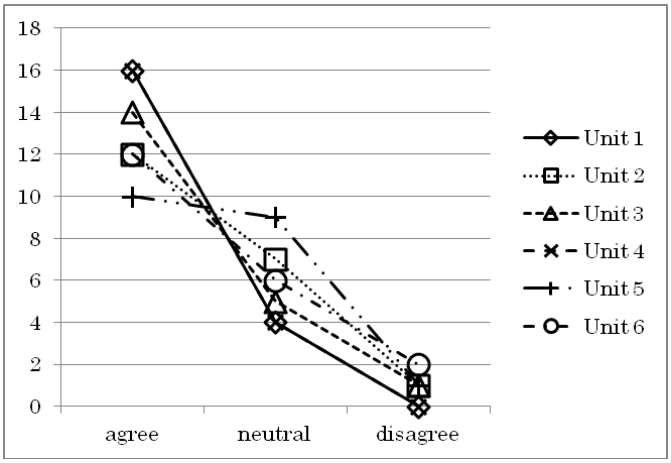



ユニット 2 は、「交通機関のマナー」というタイトルで日本での公共の場所におけるマナーに関するトピックである。前回 2015 年秋学期の調査では、このトピックに対する評価はそれほど高くなかった（24 名中 13 名が“agree”: 54.2%）が、今回は高い関心を集めることになった（20 名中 14 名が“agree”: 70.0%）。コメントからも学生が日本の文化に強い関心を持っていることが伺えたが、このトピックで扱っているような自国との習慣や風習の違いには興味を惹かれるということが見て取れる。

ユニット 4 は、今回改訂を行ったユニットである。“agree”が 20 名中 14 名（70%）で、さらに注目すべきは、“disagree”がゼロであったことである。前章でこのユニットの差し替えの経緯を述べたが、留学生が「日本食」に関して強い関心を持っていることを改めて示す結果となった。この結果から、今回の改訂プロジェクトは成功であったと言えるであろう。

次に、ダイアログの内容についての評価を比較してみる（図 5 参照）。これは、言ってみればダイアログの品質の良否に関する質問である。学生がそのトピックに興味があるかという観点ではなく、ダイアログの内容の良し悪しについてどう思っているのかを見る質問である。ここでも、どのユニットにおいても“agree”が“disagree” を上回っており、特に、ユニット 1 とユニット 4 に対する評価が高かった（いずれのユニットも 20 名中 16 名が “agree”: 80%）。また、ユニット 1、ユニット 4 いずれに対する評価も“disagree”と答えた学生はゼロであった。次いで、ユニット 3 に対する評価も高く、20 名中 14 名が“agree”（70%）の評価であった。ユニット 3 は、「夫？主人？」というタイトルであるが、日本語で、“husband”のことを“master”という意味も持つ「主人」という言葉で呼ぶことに関するトピックで、いわゆる「ジェンダー問題」を扱った内容である。このアンケートでも、最近は、LGBT を取り上げて欲しいというコメントもよく見られ、「ジェンダー問題」に関する内容に対しても関心の高さが読み取れる。

**図 5「ダイアログの内容はいいと思う」に対する賛否のユニット毎の比較**




一方、ユニット 5 については、“agree”が 10 人（50%）、“disagree”が 1 人（5%）であった。このユニットについては、先の「面白さ」の評価についても 6 ユニット中最下位で、学生間における関心の低さが見られた。タイトルは「インターネットは人類を幸せにしたか？」で、「インターネットで確かに生活は便利になったが、果たして人々を幸福にしてくれたのか」というテーマを扱ったユニットである。このトピックは、ユニット 1 と扱っている分野が似通っているにもかかわらず、学生の評価は低か

った。どうしてこういう結果になったのかを考察してみると、次のことが言えるように思われる。

インターネットの普及は、1990 年代の後半に始まり、その後、急速に拡大した。そして、今の大学生にとっては、もはやインターネットは特別なことではなく生活の一部である。従って、今更その存在に疑問を感じることはなく、存在していて当然のものとなっていると言える。例えば、「電話が誕生したことで生活は便利になりましたが、そのことによって皆さんは幸せになりましたか」と問われても、電話の存在が当たり前のことになっている現代人には、その議論の問題性を意識することができないかもしれない。同じように、今の大学生にとって、インターネットがあることの価値を改めて考えるということは、それ程多くの興味を惹きつけないのではないかと思われる。ユニット 1 と扱っている分野が近いということも鑑み、ユニット 5 が次回の改訂対象となりそうである。

今後取り上げて欲しいトピックの中には、先に述べた文化に対するコメントが散見された。“something connected to culture”、“the topics related to Japanese culture and society”、“Traditional culture”、“Japanese traditions seen today in daily life like Giri, Amae, Senpai-Kouhai”といったものがその具体的なものである。また、旅行に関する関心も変わらず高く、“Japanese tourist attractions, hidden treasures” や “Famous Japanese places”、“Traveling”、“Geography, for example, Hokkaido and Okinawa” といったコメントが見られた。これらのトピックを含め、学生のニーズと今後変わりゆくであろう世界情勢、および日本の情勢を考慮しながら、今後共新しく取り込んでいくトピックを検討していく必要があるだろう。

## 参考文献


岡崎敏雄（1989）『日本語教育の教材』アルク

岡崎敏雄・岡崎眸（1990）『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』凡人社

小林ミナ・衣川隆生編　水谷修 監修（2009）『日本語教育の過去・現在・未来　第 3 巻　教室』凡人社

J.V.ネウストプニー (1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店

髙屋敷真人（2012）「モジュール型教材による中級後期日本語開発プロジェクト」『関西外国語大学留学生別科　日本語教育論集』22 号 pp.119-133.

髙屋敷真人（2013）「モジュール型教材を利用した中級日本語会話練習—教室内と教

室外の言語活動の統合に向けて―」『関西外国語大学留学生別科　日本語教育論集』23 号 pp.131-146.
髙屋敷真人、宮内俊慈（2016）「モジュール型教材による中級後期日本語教科書開発プロジェクト実践報告（2015）」『関西外国語大学留学生別科　日本語教育論集』25 号 pp.55-68.
伴紀子（2003）「学習ストラテジーは学習の過程でどのように変化するか」宮崎里司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育　ネウストプニーのインパクト』明治書院
伴紀子 監修・宮崎里司 編著（2009）『タスクで伸ばす学習力　学習ストラテジーを活かした学びの設計』凡人社
宮内俊慈（2015）「モジュール型中級後期教科書の学生による評価」『関西外国語大学留学生別科　日本語教育論集』24 号 pp.49-69.
宮内俊慈（2016）「モジュール型中級後期教科書の学生による評価（２）」『関西外国語大学留学生別科　日本語教育論集』25 号 pp.25-54.
宮崎里司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育　ネウストプニーのインパクト』明治書院
泉子・K・メイナード（2005）『日本語教育の現場で使える談話表現ハンドブック』くろしお出版
Nunan, D. and Richards, J C. ed. (2015). *Language Learning Beyond the Classroom*. New York and Rondon:Routledge.

(mtakayas@kansaigaidai.ac.jp)
(smiyauc@kansaigaidai.ac.jp)